



と
しよ
かん
と
こん
ちゅう
もり
図書館と昆虫の森

いけ
だ
池田ゆみる



この物語に登場する本

『二分間の冒険』 岡田淳著 偕成社

『ぼくらの七日間戦争』（角川文庫） 宗田理著 KADOKAWA

一

今日は一学期最後の日。五年二組の教室は、朝からずっとそわそわしている。プールへ行く約束をしたり、旅行の行き先を自慢じまんしあったり。そしてだれもが、黒板の上にかかっている時計をチラチラ見ている。帰りの会には、みんなのテンションが最高になった。

先生は夏休み中の注意事項ちゅうけいじじこうをいくつかあげると、次は自由研究について説明した。

「内容はなんでもいいですよ。工作でも、理科の実験でも、感想文でも、好きなものを選んでください」

二学期そうそう産休さんきゅうに入る先生は、丸いお腹なかをつき出して、いつもより大きな声でしゃべった。

わたしはすぐに、伝記を読んで感想文を書こうと思った。伝記を読むのは好きだし、作文もきらいじゃない。

涼太がおかしなことを言ったのは、さようならのあいさつのあとだった。

「決めた！ おれは図書館をつくる」

それは、クラスのみんなに宣言するかのようには聞こえた。

「図書館？」

ぼかんとした顔で、みんなは涼太を見つめた。わたしにも意味がわからない。

「なに、ねぼけてんだよ。そんなものできるわけないじゃん」

だれかが声をあげる。

「まあまあ、楽しみにしててよ」

涼太は、それしか言わなかった。わたしは、にやにやしている涼太の顔を見た。

自分の家のひと部屋を、図書館にしてしまうのか。それとも、図書館の模型でもつくるということなのか。

涼太とは家が近い。よちよち歩きのところからの知り合いだ。性格もよく知っている。ときどきおかしなことを言うけれど、根はまじめで、うそはつかない。だからよけい気になった。

「どう思う？」

帰り道。いつもいっしょに下校するユリに聞いてみた。すると反対に、ユリから聞きかえされた。

「満里奈はどう思うの？」

「よくわからないよ。だって涼太って、ときどき変なこと言うから」と、わたし。

そう、涼太はすごく物知りだ。本をたくさん読んでいる。でも、とつぜんむずかしい話をはじめたり、おかしな行動をとったりする。この前は、バス停のベンチで足を組んで新聞を読んでいた。

「そのうちハッキリするんじゃない。だから、あんな変人ほつときな」

涼太はかげで、変人〴〵とよばれている。ユリは、そんな涼太のことなんか気にするなと言う。だからわたしも、涼太のことは、もう気にしないことにした。

「お姉ちゃん！」

背後から弟の声が出た。ふりかえると、ランドセルをゆらしながら弟の未月が